



日 時：平成 24 年 11 月 8 日(木) 8:10～8:40

場 所：野外研修バスの車中

出席者：36 名 出席率 50%

(会員総数 71 名休会 0 名)

1. 土井俊雄研修委員長 研修の挨拶

2. 挨拶 吉田会長

本日は、研修委員会で企画して頂いた福島県いわき市への研修旅行です。今回は、被災地訪問という従来とは異なるユニークな企画です。東日本大震災から 1 年半以上経ちますが、被災地は未だ復興が進んでいない状況です。

今回のバス旅行には東京都から、一人当たり 1500 円の支援金がでていますが、これには被災地を積極的に訪れ、励まして欲しいとの趣旨が込められています。最初、私は 1 年半以上経ってから冷やかしのような訪問は問題ではないかと思っていましたが、被災地の方の話を聞くにつけ、積極的に被災地の現状を知ることが現地の方への励ましになるようです。

いわきまでは距離が 250 キロあり、時間も少々かかりますが、これをコミュニケーションの絶好の機会ととらえ、バス車内での交流を楽しみたいと思います。よろしくお祈りします。

11 月のプロバスクラブの活動は、本日の研修旅行の他に 13 日、神戸での全日本プロバスクラブ協議会全国大会への参加、17～18 日の「いちよう祭り」の応援を致します。「宇宙の学校」関係では、11 日、本部会場で第 2 回スクーリング、25 日に桑志高校会場で第 3 回スクーリングが催されます。このようにクラブの外部活動も本格的になってきました。また、地域奉仕委員会による生涯学習サロンの計画も着々と具体化しています。それぞれの活動を会員全員で盛り上げたいと思います。よろしくお祈りいたします。

3. 例会 飯田会委員長 により開会

ハッピーコイン及びバースデーカードの贈呈は 12 月例会で実施。

4. 幹事報告 川村副幹事

塩澤幹事に代り私から報告します。12 月 9 日、いちようホールで車人形の公演がありますが、会員割引(¥4500)で入場できますので、ご希望の方は申し出てください。

5. 各委員会報告

(1) 例会委員会 飯田委員長

会員総数 71 名、出席者 36 名 出席率 50%。

(2) 情報委員会 寺田委員長

プロバスだよりの今月号の編集は阿部和也会員が担当しました。写真は今回初めてだと思いましたが、横長にしており、今後も続けていきたいと思えます。「宇宙の学校」関係では、桑志高校での開校式、及び本部の開講式の報告が載っています。投稿には、熊田会員の老々介護、同好会報告には俳句がありますので、目を通して下さい。

(3) 会員委員会 橋本晴重郎委員長

特になし。

(4) 研修委員会 土井俊雄委員長

卓話交流ですが、来年の 2 月に多摩プロバスの方がお見えになって、ブータンについてお話になる予定です。

(5) 地域奉仕委員会 橋本鋼二委員長

生涯学習サロンの準備は着々と進んでおります。開講式と閉講式の特別講師の件ですが、開講式では外国航路のベテラン船長さんにお話しして頂きますが、「世界の船旅を語る」という仮題でしたが、「世界の客船とクルージングの楽しみ方」に変更することにしました。閉講式での講話の題名は「(仮) 老いを科学する」となっていますが、耳触りの良い題名にしたいと思ひ、この場を借り

て皆様のご意見をお聞きしたいと思います。

次の三つの題名のうち、どれがよろしいでしょうか？

- ① 老化・寿命を科学する・時が人を潤す
 - ② 老いを科学する・サクセスフル・エイジング
 - ③ 老いを科学する・時が人を潤す
- 会員からの挙手多数により、③でお願いしたいと思います。ご協力ありがとうございました。

6. 「宇宙の学校」報告 荒推進室長

本日は下山邦夫運営本部長が欠席の為、私が報告を代行させていただきます。報告内容は、皆様のお手元に本日配布されました「プロバスだより」第204号に掲載されている「9. 『宇宙の学校』報告 下山運営本部長」と馬場征彦運営本部委員の「宇宙の学校」開講式の記事と同じですので、これをご覧いただきたいと思います。

また、この記事の中で10月28日の桑志高校での「熱気球を上げる」実験では、大きなビニール袋を貼り合せて作った生徒たちの熱気球が、カウント・ダウンで打ち上げられ、体育館の天井まで浮き上がった時は、参加者親子ともども大歓声を上げ、感激が会場に充満しました。

なお、この後「宇宙の学校」は、あと4回開催されますので、引き続き会員の皆様のご活躍、ご支援を頂き、この事業を大成功に導いていただきたいと思います。なお、澤渡会員が病気のため休むので、細々した雑務は内山会員に替わりますので、お知らせします。

「宇宙の学校」第1回スクーリング

運営本部長 馬場征彦

第1回スクーリングは、桑志会場（都立桑志高校体育館）では10月28日（日）に60組中56組の親子が出席して行われ、本部会場（八王子教育センター）では11月11日（日）に68組中60組の出席で実施されました。

桑志会場の第1テーマは「ストローロケットを飛ばそう」、第2テーマは「熱気球を上げよう」で「飛ぶ」が共通テーマでした。KU-MA（子供・宇宙・未来の会）の山下法昭先生から“空を飛ぶことは人類の長年の夢であり、気球→飛行機→ロケットとその夢を実現してきたこと、現在は火星で探査機「キュリオシティ」が活躍するまでにな

った”とお話があり、スクーリングが行われました。高校生のボランティア活動は一層立派になりました。本部会場の第1テーマは「ストローロケットを飛ばそう」、第2テーマは「静電気で遊ぼう」で山下先生の指導で実施されました。東京工科大学・拓殖大学・スコール家庭教育振興会・サイエンスドーム・当クラブのボランティアが支援しました。

以下テーマ別のスクーリング状況を記します。

1) 「ストローロケットを飛ばそう」：衛星打ち



上げロケットの発射映像を見た後に、“本テーマでロケットをまっすぐ飛ばす方法を学びます”との前置きがあり開始しました。

まず1本のストロー（片方をセロハンテープでふさぐ）を使って①おもりなし②前におもり③後ろにおもりの3ケースについて、ランチャーで飛ばしてどれが良く飛ぶかをチェックしました。（打ち出し角度も重要）。次に2本のストローをつないだ長いロケットで、前の実験で最も良く飛んだケース（みなさんが③でした）と同じ位置に重りをつけてランチャーで確認しました。結果は前におもりをつけた2本連結ストローロケットは予想以上に良く飛びました。打ち上げのカウントダウンもあり参加した子どもは勿論、親も大いに楽しみました。先生から“衛星打ち上げロケットでも衛星は先端に搭載する”と追加説明がありました。

2) 「熱気球を上げよう」：4枚の業務用ポリ袋



を切り貼りして大きな熱気球（風船）を作りその上に絵を描きました。ドライヤーを利用したランチャー（発射装置・ガスバーナーを利用）から温風をこの気球に入れて膨らませ、カウントダウンで熱気球を上げました。

熱気球はゆっくりと上昇し、体育館の天井にまで達しました。10秒ほどで今度は徐々に降りてきて着地しました。この実験で、①熱気球は何故

徐々に上がるのか（暖かい空気は軽い）②しばらくすると何故降下するのか（気球内の空気が冷える）、について考え学びました。憧れの熱気球を作って上げる実験に、子供達は体育館を走り回り大きな歓声をあげて楽しみました。



3) 「静電気で遊ぼう」：始めに先生から静電気とその性質について説明がありました。（静電気にはプラスとマイナスがあること、プラス同志やマイナス同志は退け合いプラスとマイナスは引き合うこと）。実験①蛍光灯を点ける；毛皮でこすった塩ビ管を蛍光灯の電極に付けると蛍光灯が薄く点灯、実験②竹トンボ型に回転できるようにしたストローに毛皮でこすった塩ビ管を近づけると逃げるように回転する、実験③つるした野菜のネギにこすった塩ビ管を近づけると引き寄せられて回る、実験④水をいれたペットボトルの下部の小穴から飛び出る細い水に、こすった塩ビ管を近づけると水が塩ビ管に引き寄せられて曲がる、実験⑤電気クラゲ；小片の荷造り紐を細かく裂いたもの（クラゲ）と3本のストローをティッシュペーパーでこすり、クラゲをストローの上から落とすとストローを避けようとして空中に浮かぶ。いずれについても先生から何故そうなるのかの説明がありました。

なお本部会場では、今回早くも3件のレポート提出がありました。両会場ともにテーマ1と2の間に、プロバスの宮城会員によるリラックス体操があり、場を和ませました。

7. 同好会報告

お茶の会 阿部治子会員

12月の例会日18日（火）は、午後3時に拙宅にお集まり下さい。その後忘年会をいたします。

歴史の会 土井俊雄会員

10月25日に港区に行ってきました。23名の申し込みがありましたが、体調を崩した方が続出し16名になりました。増田会員のガイドで楽しい一日でした。

ゴルフ、写真、囲碁、麻雀、美術、俳句、旅行同好会 特になし。

8. その他

八王子いちよう祭りについて 佐々木 研吾

先月の例会で説明したところ、プロバス便りに丁寧に書いて頂きました。一部割愛した所がありますので、残したところをお伝えしたいと思います。まず、通行手形の販売にご協力をお願いしたい。追分から小仏までの間に12の関所を設けています。完歩すると8,000歩といわれていますが、完歩賞がもらえます。その手形を下田会員に販売をお願いしますので、ご協力ください。いちよう祭りの総予算は2,500～2,600万円ですが、500万円が市からの補助、残りはいろいろな方法で調達しますが、手形の販売は其中でも重要な財源の一つです。ご理解いただきたい。

また、会場本部受付のお手伝いについても手を挙げて頂いており、有難うございます。これは、いちよう祭り祭典委員長と名誉会長（市長）との連名でプロバス会長あて依頼状が出ていて、これに基づいて地域奉仕委員長を通しお願いしています。

クラブの多くの仲間がいちよう祭りにエントリーして、またはスタッフとして活躍しておられます。会員の皆さん、会場を訪れ、立ち寄って声をかけてあげてください。

9. 閉会の挨拶 荒副会長

今日は東北の震災跡を視ます。どこでもいつでも起こるものですので、日頃の準備が大切です。夏にチベットのラサに行ったのですが、停電があった時、旅行社のアドバイスで懐中電灯を持っていたので、大変役立ちました。これを教訓に夜は枕元に懐中電灯を置いています。皆さんも準備を。

野外研修

参加者36名を乗せたバスはJR八王子駅南口を07:30に出発し、中央道・首都高速・常磐道を経て、一路、福島県いわき市を目指した。車中で、宮城会員と下田会員の漢字遊びを楽しみながら、5時間後の12:30頃、いわき市内の小料理屋「一平」に到着、昼食をとる。食事中に女将さんから、津波の被害の詳しい説明があった。食事をした大座敷も浸水したとのこと。

食後、すぐ近くの魚介類販売所に立ち寄り、復興支援の思いを込めて、お土産を買いこんだ。

そのあと近隣の被災地跡を車窓から視察。住宅・建物が地震と津波できれいに流され、コンクリートの土台だけの所が、なんと多いこと。被災後約1年半経過しているが復興いまだしの感あり。

更に塩屋崎に移動し塩屋崎灯台前の土産物店で、津波を経験した男性から、11回に及ぶ、津波・引き波の恐ろしさを、多くの写真を指さしながら説明を受けた。

その後、国宝・願成寺白水阿弥陀堂（がんじょうじらみずあみだどう）を見学。ここは紅葉の名所として知られ、当日は見頃の紅葉を堪能した。21:00 無事八王子に帰着した。ご苦労様。



モンゴルを訪ねて

渋谷 文雄

旅の会第1回の海外旅行は、10余年前、今は亡き当クラブの会員であった桂会員が開いた「モン



ゴルとの友好の道」を引き継いだ立川会員の企画と、桂会員が育てた現地のアンガル氏の協力に依って実施することが出来ました。

モンゴルは紀元前2百年頃の騎馬民族「匈奴」に始まり、秦の始皇帝がその侵略を防ぐ為に構築し始めたのが万里の長城です。突厥や契丹、金等々歴代の支配勢力を統一したのが民族の英雄チンギス・カンです。

現在のモンゴルはソ連の支配から独立し、国名も人民共和国をはずし「モンゴル国」となりました。国の面積は日本の約4倍、人口は約3百万弱とされていますが、人口の3分の1強の120万人が、首都ウランバートルに居住しているとの事、市内の混雑、車の渋滞は酷いものでした。

しかし一歩郊外に出ると一目千里、広々とした草原が地の果てまで続いています。彼らはもともと羊や山羊・牛馬などを放牧し草原を移動して生活する放牧民族ですから、定着した家を持たないのが常識でした。それが今は希少金属や良質な石炭等の輸出を背景に近代国家建設が始まり、子供が生まれると国から無償で300坪近い土地が支給

され、放牧地に野菜を作る会社が誕生したり、不動産や建設会社が大繁盛、有史以来の放牧民族が定着民族に変貌しつつあります。店には輸入品のバナナも林檎も葡萄も桃も何でもあり、昨年の成長率は12%、中国に追い付け追い越せという雰囲気でした。

私達は昔マルコポーロが訪ねた北のシルクロードの要衝、チンギス・カンの開いた首都カラコルムの遺跡を訪ね、ゲルに泊まり、星空に感動し、博物館を観て、馬頭琴に耳を傾け、モンゴル酒に酔い痴れ、「楽・学・豊」の旅を満喫して帰国しました。

インフルエンザ考

久野久夫

今年もまた、インフルエンザの季節になってきた。毎年のように抵抗力のない小児そして体力の



衰えた高齢者が犠牲になられたというニュースを聞くにつけ、心痛む思いである。

そもそもインフルエンザなる言葉が日本で初めて使われたのが明治23年(1890年)と言うから、約120年前のことである。それ以前にもインフルエンザが日本で猛威を振るうことがあったが、インフルエンザと呼ばれる前は「お駒風」(1776年)「お七風」(1802年)と、まるで海外の台風のように女性の名前がついていた。現在は女性が強い時代と言うが、100年以上前もそれは同じであったようだ。時代は巡る?それとも時代は変わらない?いずれにしても「有史以来、何時の世でも女性は強い」……。

話を戻して、インフルエンザウィルスは「寒さ」と「乾燥」を好むそう。冬場に流行る所以である。そして厄介なことに流行るたびに微妙に「型」を変えるため、予防と言え手洗いとうがい励行、そして自己免疫を高める他に有効な手立ては少ない。ワクチンとて万能ではなく、100%の感染予防は難しく症状を重篤化させないのがせいぜいである。結局、インフルエンザから身を守るには温かくして、美味しい物を食べ、充分なる休養・睡眠をとると言うことであろうか。

自宅への道すがら「かまどの煙り、なべの湯気」

と書かれた看板を掲げた食事処がある。なべ料理にはインフルエンザウィルスの嫌う「温かさ」「湿り気」そして「充分なる栄養素」が含まれる。そして、家族・仲間と皆でひとつなべを囲み、なべをつつくという団欒のぬくもりと心の潤いがある。今晚あたりひとつ鍋料理でも如何？

全日本プロバス協議会全国総会ツアーに参加して

田中信昭



11月13日、神戸にて全国総会が開催され、それに合わせて当クラブでは立川富美代全日本プロバス協議会副会長の肝いりでツアーが計画され、私は初め

での参加でありましたが、簡単に楽しかった雰囲気をお伝えしたいと思います。決して全国総会の正式な報告というようなものではありません。

1) 総会の概要

11:00 ANAクラウンプラザホテル神戸にて、全国28のクラブから、180名が参集、約2時間で議事と7ブロックからの報告があり、その後約2時間の懇親会。当クラブからは吉田信夫会長始め15名が参加（別途渋谷文雄会員は東京日野クラブから参加）。議事内容は別途資料があるのでそちらをご参照頂くとして、今回から理事会構成メンバーに交代があった事は特筆すべきか。新会長；横濱プロバス倶楽部 加藤武氏、新幹事長；同倶楽部 森山功氏、新会計監査；四日市南プロバス倶楽部 高野健氏、尚当クラブの立川富美代氏は副会長留任が正式決定した。各ブロックからの活動報告では、ほぼ毎回関東ブロック代表で我がクラブが発表しているが、今回も下山邦夫元会長から「八王子宇宙の学校」の活動状況が報告された。他とは格の違いを感じ、誇らしく思うと共に先人たちの方向付けの素晴らしさと地道な活動の継続に改めて頭の下がる思いであった。総会後の懇親会で各クラブメンバー間の交流が行われた。ホストクラブの「神戸北」は会員数18名というから、近隣のクラブの応援を得ての事であったと思うが、大変ご苦勞であったろうと思われる。

我々15名はそのままホテルに宿泊。さあ終わったぞという訳で、解放気分の一行がホテル近くの

居酒屋で一杯。先の懇親会で偶々同じテーブルになった他クラブのメンバーの元大学教授だったとか何とかと自慢げに話すのが頭に来て、ついつい悪酔いしてしまって欠席した某氏もいましたが、逆に今回で大役を終えられてホッとされた「神戸北」の吉川幹事長がジョインされ、氏を囲んだ我が女性陣の大いなる盛り上がりで圧倒されたことでした。

2) 北淡震災記念公園見学と鳴門うずしお観潮
翌日は神戸を発って垂水から明石海峡大橋を渡り、大阪湾と播磨灘を両側に眺めながら一路淡路島へ。1995年（平成7年）1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災で地表に現れた活断層である野島断層の一部が保存館として今に残されており、その大きなズレを目の当たりにして、地震のエネルギーの大きさと自然の脅威を痛感した。震度7の突き上げる衝動を体験できるコーナーではその轟音の実記録と共に、あまりのショックに全員悲鳴。午後は淡路島を縦断、大鳴



門橋で鳴門海峡を渡って徳島側に入り、うずしお観潮船に。あいにく風が強く海が荒れていたが、それが逆に船を揺らし、うずしお観潮を面白くした。その日の宿所は大鳴門橋の麓、ルネッサンスリゾート・ナルト。

朝出発までに時間があつたので、近くの布引の滝や北野の異人館めぐりをした人もあつた。昼間は大勢の観光客で賑う風見鶏の館もひっそりと紅葉に包まれていた。「何故誘ってくれなかったの～」と女性陣の声。

夜は瀬戸内の旨い魚に舌鼓を打ちながらの楽しい晩餐会であつたが、食後は「阿波踊り」の実演鑑賞が楽しいもてなしであつた。若い踊り手たちのはち切れんばかりの笑顔と激しいお囃子のリズム！中にその道50年というベテランの男踊り等々。もう見ている方も今にも踊り出さんばかり。「踊る阿呆に観る阿呆、同じ阿呆なら踊ら

にや損々”と観客も俄か仕込みの不格好も何のそのみんなでひとしきり阿呆になった事であった。

3) 大塚国際美術館見学



ホテルのすぐ側にある大塚グループ創立 75 周年記念事業として 14 年前に設立された日本最大級の「陶板名画美術館」、ここは私も初めてであったが、それは凄いもので、とても 2 時間やそこらで見尽くせるものではなく、是非改めて何度でも行ってゆっくり鑑賞したいものだと思った。古代壁画から現代絵画まで至宝の西洋名画 1000 点以上が陶板でオリジナル作品と同じ大きさに複製されたものが、延べ床面積 3 万㎡に展示されている。

入るといきなり正面にあのバチカンにある「システリーナ礼拝堂」のホールがあり、ミケランジェロの天井画と壁画が我々の度肝を抜く。本物と見紛う素晴らしい絵画が直ぐ傍にあり、手を触れてもいい、写真を取るのも自由。後になってパンフレットを見てあれも見てくれば良かった、これも、と悔やまれる。私にとって大変興味深かったのは、修復前と修復後の実物大の壁画が同じ部屋の向かい合わせに展示されていた「最後の晩餐」であった。日本に居ながらにして世界の美術館が体験できると共に、火災や退色劣化を免れないオリジナル作品の記録保存の在り方に貢献するものとして貴重な存在となろう。

流石に神戸と縁の深い立川さんが、是非皆さんをここに連れて行きたいと思って練られた今回のツアー、至れり尽くせりの有意義で楽しいものでした。ご同行の皆さんとも今まで以上にお近づきになることが出来ました。感謝！

俳句同好会便り 河合 和郎

私の一句～11月の句会から

11月の兼題は「菊」。賑やかで楽しい句会でした。皆さんの一句をご紹介します。

永平寺七堂伽藍秋の空 東山 榮

秋空の下に広がる永平寺の大景をさらりと詠む。十七文字は無限の世界が描ける小さな巨人。

来る人を待つ秋の夜や膳急ぐ 阿部 治子

親しい友人の訪れを待つ期待感が伝わってくる。「膳急ぐ」に心弾む思いがよく詠われている。

菊花散る千鳥ヶ淵の闇深し 山形 忠顕

戦後 67 年。大戦による大きな犠牲と悲劇。その深く重い闇がはれるときはくるのだろうか。

小春日や金蛇もまた陽を求め 馬場 征彦

小春の温かさに誘われて金蛇も日向ぼこ。大自然の恵みは誰にも平等だ。観察から生れた一句。

茜空秋刀魚一匹酒二合 渋谷 文雄

酒の句の第一人者。酒の楽しみを詠って骨太な秀句。リズムよし。一匹二合の取り合わせが絶妙。

庭先に夕日を浴びて残り菊 石田 文彦

夕照が庭に咲き残った菊の一叢を朱に染めている。その一瞬を捉えた写生句。俳句的観察の賜。

燧岳水面に映す草紅葉 田中 信昭

燧岳を背景に雄大な景色が広がる尾瀬ヶ原。草紅葉に染まった湿原の色彩が立体的に描けた。

不動尊拝して菊の香りきく 飯田富美子

高幡不動尊に参じたときの作とか。敬虔な祈りと清々しい菊の香の取り合わせが佳句を生んだ。

白菊や細きうなじの君遠く 河合 和郎

俳句は夢想・空想の世界にも遊べる。こんな憧れの君が居ても……。老いてなお熱き夢の世界に。

お知らせ



① 武田会員が、11月4日、石森八王子市長より、八王子市北野余熱利用センター開館 15 周年に当たり、“ボランティアとして永きに亘り、「あったかホール・リサイクル工房」の運営に尽力し、ゴミ減量や環境啓発に多大に貢献をした”として感謝状と記念品を拝受しました。お目出とうございます。

② 囲碁同好会の一泊秋季大会が陣谷温泉で開催され、矢崎会員が 6 勝 1 敗で優勝しました。

(編集後記) 毎回のことながら、6 ページにピタリと収めるのに一苦勞。 矢崎安弘